

241

多剤耐性腫瘍細胞の ^{99m}Tc -ECD 取り込み
小西章太、一柳健次 (福井県立病院 放)
絹谷清剛、横山邦彦、道岸隆敏、利波紀久 (金沢大 核)
P388 マウス単球性白血病細胞の多剤耐性株
P388/ADR と薬剤感受性株 P388/S について ^{99m}Tc -ECD
の取り込みをインビトロで検討した。各の細胞を培養
液中で ^{99m}Tc -ECD と室温でインキュベーションし、それ
ぞれの取り込みを経時的に測定した。またベラパミル
100 μM の存在下での取り込みも観察した。
P388/ADR の ^{99m}Tc -ECD 取り込みは P388/S に比べ
てやや低く、細胞からの比較的はやい洗い出しが認めら
れた。またベラパミルの存在下では P388/ADR の取り
込みが促進された。 ^{99m}Tc -ECD は P 糖タンパクによっ
て細胞外へ排出されている可能性が示唆された。

242

^{111}In 標識血小板シンチグラフィの血栓性疾患
における有用性の検討
宮崎知保子、久保公三、斎藤絵里、佐藤朝之、塚原亜希子、
作原祐介 (市立札幌病院 画像診療)
血栓性疾患が疑われた42例に、45回の ^{111}In 標識血小板シ
ンチグラフィが施行された。男性20例、女性22例で平均年
齢 57.1 ± 16.8 歳、17回での平均血小板標識率は $66.8 \pm 14.8\%$
であった。心疾患10症例中陽性所見を示したのは1例のみ
であった。肺塞栓症12症例 (13検査) で胸部に陽性所見が
みられたのは5症例であったが、10症例では下肢などに陽
性所見を示した。動静脈血栓を疑われた7症例では5例で
陽性所見を示し、血小板減少症10症例12検査で、慢性DIC
を伴った6例はすべて陽性を示した。その他、抗リン脂質
抗体症候群2例、原発性肺高血圧症1例ではいずれも陰性
所見であった。心臓疾患や肺塞栓症では、血液プールの像に
障害され、判定困難症例が多く経験された。

243

潰瘍性大腸炎とクローン病における ^{99m}Tc -白
血球イメージングの診断能
油野民雄、斎藤泰博、秀毛範至、山本和香子、薄井広樹
(旭川医大 放)、佐藤順一、石川幸雄 (同 放部)、
綾部時芳、高後 裕 (同 3 内)
炎症性腸疾患である潰瘍性大腸炎とクローン病におけ
る ^{99m}Tc -白血球イメージングの診断能を検討した。潰瘍
性大腸炎35例とクローン病10例における白血球イメージ
ングの陽性率は、それぞれ24例の69%と2例の20%であり、
潰瘍性大腸炎で有意に高率に陽性結果を示した。ヒトの
炎症性腸疾患モデルである2,4,6-trinitrobenzene
sulfonic acid (TNBS) 惹起性ラット大腸炎で検討した結
果、TNBS投与4日後 (潰瘍性大腸炎モデル) では ^{99m}Tc -
顆粒球の集積を認めたのに対し、投与3週後では ^{99m}Tc -
リンパ球の集積を認め、主たる浸潤細胞の相違が、上記
診断成績に大きく関与していることが推察された。

244

癌患者のQOL、性格、血中カテコラミン値と
局所脳血流量の関係
小森 剛、松井律夫、足立 至、中田和伸、清水雅史、
末吉公三、橋林 勇 (大阪医大・放)
放射線治療中の癌患者7名 (男・女=3・4 平均53.3歳) に
おいて、局所脳血流量とQOL、性格、血中カテコラミン値
の関係を検討した。QOLは栗原式QOL質問票、性格は東大式
エゴグラムを用いて評価した。局所脳血流量はI-123 IMP
を用いたARG法で測定した。その結果、QOLと局所脳血流量
の間には有意な相関はなく、エゴグラムのなかでは
Critical Parentと右側頭葉血流が最もよい相関を示した
($r=0.895$, $p<0.01$)。カテコラミン値はドーパミンと左前
側頭葉 ($r=0.867$, $p<0.01$)、左上側頭葉 ($r=0.899$, $p<0.01$)
右上後頭葉 ($r=0.896$, $p<0.01$) でそれぞれ有意な相関を示
した。癌患者の性格および血中ドーパミン値が局所脳血流
量に関係している事が示唆された。